

## 水本精一郎教授の思い出

柴田勝二

私は昭和六三年四月に山口大学人文学部に着任し、四年間水本精一郎教授と一緒に仕事をさせていただいた。山口大学は私が大学教師としての職を得た最初の勤め先であり、大学院を出たものの、研究者としての就職先がなく、神戸の予備校で国語の教師をしていた私にとっては、かけがいのない機会を提供していただいた恩人である。

水本先生と最初にお会いしたのは昭和六二年の八月だったと思うが、教員公募の書類選考を通った私と会いに大阪に來られた水本先生とホテルのロビーでお目にかかった。その時先生は別の用件を兼ねて大阪に來られていたはずだが、「面接試験」と思つて緊張してホテルに赴いた私を、にこやかな笑顔で迎えてくださったのを覚えている。お会いしてみると、やや関西なまりのある言葉から、先生が私と同じ関西の出身であることが分かった。穏やかな表情で相手のいうことに耳を傾け、話をされる物腰に接して、こういう人と同じ勤め先になれるとすばらしいのだが、という思いを抱かされた。その後幸いにも私の願いは叶えられて、翌年の四月から私は、水本先生がそれまでおられた研究室を譲り受ける形で、初めて大学の教師として勤めることになった。先生が後進の者にわざわざ研究室

を譲つて、ご自分は別の階の部屋に移られたのは、五年後の定年を意識されたことだつたと思うが、そうした配慮にも優しさを感じられて有難かつた。私は研究室という独立した空間を占有することができることに感激し、当初住んでいた大内御堀のアパートから毎日嬉々として大学に通つた。アパートと大学の間に広がっているのかな光景を眺めながら自転車をこぐのは、尼崎という殺風景な都会に育つた私には新鮮な経験だつた。ちなみに水本先生も尼崎の高校で教鞭を取つておられたことがあり、そうした生活圏の共通性にも何か縁が感じられた。

山口は小さな街で、自転車で大体どこにも行くことができたが、水本先生が宮野のお宅からかなりの距離を自転車で來られるとうかがつて、そのタフさに驚きを覚えた。先生は六十歳を超えても悠々と自転車をこいで大学に來られていたが、先年その自転車に乗つていたところを交通事故に遭われたということを耳にした際には、失礼な言いながら、何か皮肉な運命めいたものを感じざるをえなかつた。

山口大学で初めて大学教師としての仕事を始めた私にとって、どのように授業をすればよいのかまったく手探りであつた。水本先生

はご自分の演習、講読の授業での学生の発表レジュメを見せてくださり、それに倣う形で何とか近代文学の授業を始めることができた。分野的には水本先生が明治、大正時代の文学を担当され、私が現代文学を担当するという形になったが、水曜日に組まれていた演習の授業は、先生がセンター試験の作問のために東京に出張されることが多いために、私と二人で担当していた。二人が一緒に授業に出る際には、水本先生の発言や仕草に間近に触れることができ、啓発されるが多かった。少し上を向いて、首を回しながら学生の発表を聞く先生の独特のポーズは、今でも眼に焼きついている。私はレジュメやテキストを見ながらでないと学生にコメントすることもできなかつたので、それらを見ずに学生の発表を頭に入れて、的確なコメントを出される先生のやり方は、離れ業のように思われたものである。

水本先生の学生に対する指導は、基本的に作品の一行一行を読み込み、そこに語られているものを緻密に分析させるというものであったが、作品を大づかみにすること傾向の強い私自身にとっても、示唆を与えられるやり方であった。また学生もその要求に応じて、毎回厚いレジュメを作ってくることも驚かされた。私が後に移った大都市圏の大学の学生にはない、真面目さが山口大学の学生にはあり、水本先生とともに学生の熱心な発表態度が思い出されることが一再ならずある。この先生の緻密な読みを重んじる作品の鑑賞の姿勢は、当然ご自分の研究にも反映されており、島崎藤村を中心とする一連のご論考は、私自身の研究分野とは異質なだけに、示唆を与えられることが大きかった。

その後水本先生は定年まで一年を残して大分の県立芸術短大に移

られ、山口との往復生活に入られた。私自身は山口大学に五年間勤務した後、大阪・東京と勤め先を変わったが、今でも山口での生活は懐かしい思い出である。先生のご冥福を心からお祈りしたい。

(しばた・しよじ)